

呪われた森の奥で魔物  
に囲まれたカントを助  
けた傭兵が「報酬は金  
じゃなくていい」と焚  
き火の明かりだけの野  
営地で対価を求める話

ガルドの指が背中中の傷を辿っている。軟膏を塗るという名目の、丁寧すぎる手つきで。

「……そこに傷はない」

声が震えた。肋骨の下から脇腹へ、ガルドの指は傷の輪郭をとうに外れている。

「ああ、なかったな」

平然と答える声が背中から降ってくる。指は離れない。腰のくびれをなぞるように降りていき、背骨に沿って這う。

「やめろ……っ」

「お前が動かないから、続けていいのかと思った」

嘘つき。こいつは最初から、こうするつもりだったんだ。  
——六時間前。呪われた森ヴェルデノーチェの黒林で影喰いの群れに囲まれ、死を覚悟した。短剣一本で足りるわけがない。三匹目を仕留めた時には腕がまともに上がらなくなっていて、四匹目の牙が脇腹を掠めた。

そこへ、こいつが現れた。

両手剣の一閃で影喰いを二匹まとめて叩き斬り、返す刃でもう一匹を両断し、最後の一匹は蹴り飛ばしてから首を落とした。

血飛沫の中に立つ長身の影。焚き火もない暗闇で、ガルドの目だけが獣みたいに光っていた。

「一人でこんな森の奥に来るとは、馬鹿か度胸があるかどっちだ」

「……助けは頼んでない」

「足、震えてるぞ」

その通りだった。膝が笑って、立っているのがやっとで。  
——だから今、こうして岩壁の窪みで焚き火を囲んでいる。  
帰路は魔物が塞いでいて、夜を越えるしかなかった。

報酬の話をしよう、とガルドが言い出したのは、焚き火を起こした直後だった。

「金ならある。月涙草一株で銀貨二十枚にはなるから——」

「金じゃなくていい」

身構えた。何を要求されるか分からない恐怖が喉の奥を握りつぶす。

ガルドは焚き火越しにこちらを見て、無造作に左腕を差し出した。影喰いの爪に裂かれた傷が、革鎧の隙間から覗いている。

「お前、薬草師だろう。これの手当てくらいできるか」

拍子抜けした。安堵が漏れそうになるのを噛み殺して、薬草袋から軟膏を取り出す。  
——だから今、こいつの傷を手当てしている。していたはずだった。

ガルドの腕に触れた時から、指先がおかしかった。硬い筋肉の隆起、革鎧の下から立ち昇る体温、汗と血錆が混じった雄の匂い。包帯を巻く指が何度も滑った。

結び目を作ろうとした瞬間、ガルドが腕を引いた。リュカの身体がガルドの胸に倒れかかる。顎の先が鎖骨にぶつかり、至近距離で傭兵の顔が焚き火に照らされた。左頬の古傷に影が落ちている。

「悪い、腕が痺れて動いた」

嘘か本当か分からない。ただ、引き離す手に力がこもっていなかった。

「……気をつけろ」

乱暴に突き放して距離を取る。心臓がうるさい。脈がこめかみまで響いている。理由の分からない動揺に苛立って、マントの中に潜り込んだ。

——眠れるわけがなかった。

（あの傭兵に触れた時の感触が消えない）

硬い腕。体温の高さ。指先が覚えている、皮膚の下の筋繊維の感触。

（馬鹿か。こんな森の中で、男の身体に——）

頭を振る。違う。動揺してるんじゃない。戦闘の後で気が昂っているだけだ。

……なのに、股間がじわりと熱い。

カントの身体。男の見た目で、股間には女性器がある。この身体のせいで村を追い出された。「化け物」「男でも女でもないもの」——あの声が蘇るたびに、自分の身体ごと消えてしまいたくなる。

だから一人で生きてきた。誰にも触れなかった。触れられてもいけなかった。知られたら終わる。

焚き火が爆ぜる。ガルドの寝息が聞こえる——本当に寝ているのかは分からない。

早く朝になれ。

朝になって、森を出て、この男と二度と会わなければいい。——朝が来た。眠れないまま、空が白み始めるのを数えていた。

「この先に泉がある。水を汲みに行く」

ガルドが立ち上がる。リュカも立った。一人で残される方が怖い。それに、泉の近くにもう一株月涙草があるはずだ。

祠の遺跡に辿り着いた。岩に囲まれた小さな泉。水面が鏡みたいに凪いでいて、周囲の木々と空を正確に映している。

「俺は先に水を汲む。お前は薬草でも探してろ」

ガルドが泉へ向かい、リュカは祠の裏に回った。月涙草を探しながら、昨夜の戦闘で負った背中と脇腹の擦り傷が気になる。軟膏を塗りたい。チュニックスを脱ぐ必要がある。

ガルドは泉の方にいる。ここからは見えない。

チュニクの紐を解き、上半身を晒した。朝の冷気が素肌を刺す。脇腹の傷に軟膏を塗り、ズボンを腰骨まで下ろして、裾に隠れた傷にも手を伸ばし――

足音。想定と違う方角から。

振り返った時にはもう遅かった。ガルドが祠の裏手から戻ってきている。上半身裸、ズボンは腰骨の下までずれた状態。慌てて服を掻き集める手が震え、足がもつれ、転んだ。

ズボンがさらにずり下がる。

ガルドの視線が、リュカの股間を捉えた。

一瞬の沈黙。森の葉擦れの音すら消えた気がした。

「見るなッ……！」

叫んで、両手で隠す。指が震えてまともに覆えない。血の気が引いていく。頭の中で、村を追われた日の記憶が閃光のように弾けた。

「化け物だと思うか。気持ち悪いか。笑えよ――笑えばいいだろう」

攻撃的に吐き捨てた。先に自分から刃を向ければ、向けられる刃は少しだけ浅くなる。そう学んできた。

ガルドは笑わなかった。

代わりに自分のマントを外して、投げた。

「隠せ。風邪を引く」

それだけ。

気持ち悪いとも、珍しいとも言わない。リュカの手がマントを受け取る。震えが止まらない。こんな反応をされたことがない。罵倒されるか、好奇の目で舐め回されるか——どちらかしか知らなかった。

「何も……言わないのか」

「言うことがあるか？ お前が男だろうが女だろうがカントだろうが、俺の報酬には関係ない」

——泣きそうになった。

泣いたら負けだ。こいつに弱みを見せることになる。奥歯を噛み締めて、涙腺を力ずくで押さえ込む。

「お前の脇腹の傷。自分で塗ったのか。背中が届いてないだろう」

「いい、自分でやる」

「届いてないと言っている」

ガルドが近づいてきた。抵抗する間もなく背後に回られる。

「動くな」

低い声。命令の響き。

——そこから先が、冒頭の場面だ。

ガルドの指が背中に触れている。軟膏の冷たさと、指の熱さ。二つの温度が絡み合って、背中の皮膚が粟立った。大きくて硬い指先が、傷の周囲を慎重に辿りながら軟膏を広げていく。

(……丁寧だ)

想像と違った。乱暴に扱われると覚悟していたのに。あの両手剣を振るう手が、こんな触り方をする。

指が背中から脇腹へ移った。肋骨の下をなぞるように滑り、腰のラインに沿って降りていく。

傷はもう、とっくに終わっている。

「そこに傷はない」

「ああ、なかったな」

指は離れない。腰骨の上を親指がゆっくりと円を描く。背中に押し当てられたガルドの胸板から、心臓の鼓動が直に伝わってくる。速い。——こいつも、脈が速い。

リュカの身体が反応していた。乳首が硬くなる。マントの下で、おまんこがじわりと濡れ始めている。

(やめろ——こんな身体が反応するな——)

ガルドの手が肩に置かれたまま、唇が耳元に寄った。吐息が耳朶にかかる。湿った熱が鼓膜を舐めるように震わせた。

「昨夜の報酬の話、まだ終わってない」

「傷の手当て……しただろう」

「あれは前金だ」

下腹部にじわりと熱が集まる。おまんこの奥が脈打つように疼いた。こんな感覚は初めてだ。自分の身体が、この男に反応している——その事実が恐ろしい。



カントの身体を持っているから、誰にも触れさせてはいけなかった。触れさせたら、この身体が目覚めます。目を覚ましたら——男として生きてきた全てが崩れる。

遠くて、影喰いの遠吠えが響いた。日中なのに。

ガルドの手がリュカの肩から離れ、剣の柄に移る。一瞬で傭兵の顔に戻っている。

「移動するぞ。ここは長居する場所じゃない」

中断。

膝から力が抜けそうになるのを堪えて立ち上がる。安堵している——のに、身体の奥には、認めたくない物足りなさが熾火みたいにちろちろと燦っていた。

移動中。ガルドが前を歩き、リュカが後ろをついていく。

(あの男は知った。カントだと知った。なのに態度が変わらない)

背中に残る指の感触。脇腹をなぞられた時の——傷でもないのに触れられた意味。耳元に落ちた吐息の湿度。

(……どういふつもりだ)

歩くたびに、股間がじわりと濡れる。カントの身体が、ガルドに触れられたことで覚醒していた。太腿の内側を、ぬるい液体がじんわり伝い落ちる。

(やめろ……勝手に反応するな……っ)

認めたくない。認めてしまったら、もう「男として生きる」という唯一の拠り所が崩れる。

「遅いぞ。疲れたか」

ガルドが振り返った。

「疲れてない」

「顔が赤いぞ」

「暑いだけだ」

ガルドが何か言いかけて、やめた。水筒を投げてよこす。

「飲め」

受け取る。金属の口が冷たい。——ガルドの唾液がついていられるかもしれない。一瞬だけ躊躇して、構わず口をつけた。水が喉を流れ落ちる。冷たい液体が食道を降りていくのに、身体の芯が冷えない。

(……間接的に、口がつながってる)

馬鹿な考えを振り払う。ガルドがそれを見ている。目が細い。

——森を抜けられなかった。二晩目の野営。ガルドが岩場に焚き火を起こす。

影喰いの遠吠えが遠くで聞こえる。マントに包まって座っているが、寒さで歯の根が合わない。高地の夜は身を切るように冷える。

「凍え死にたいなら好きにしろ。嫌なら来い」

自分の隣を顎で示した。

「……断る」

「そうか」

ガルドは肩をすくめて横になった。

——しかし、本当に寒い。指先の感覚がなくなってきた。体温が下がっている。このまま朝まで持つか分からない。

屈辱を噛み締めながら、ガルドの隣に移動した。

ガルドは目を閉じたまま、自分のマントをリュカにもかけた。二人分の体温。革鎧の下筋肉が、背中に密着する。

「……っ」

熱い。この男の体温は異常だ。炉みたいに熱い。背中全体にガルドの体温が染み込んでくる。

ガルドの腕が腰に回された。

「逃げるなよ、冷える」

指先が服の裾から僅かに素肌に触れている。意図的かどうか——いや、もう分かっている。この男のすることに偶然はない。

下腹部がまた熱くなる。おまんこがじわりと潤みを帯びるのを感じて、自分の身体に命じる。やめろ。反応するな。

ガルドの指が動いた。腰骨をなぞる。ゆっくりと。明らかに意図的に。

「寝ろ」

低い声。なのに指は腰を撫でている。矛盾している。

「な、にしてる……っ」

「寝かしつけてる」

「嘘つけ……っ」

声が裏返った。ガルドの指が腰骨の下、下腹部の際まで降りる。服の裾に潜り込んだ指先が素肌に触れた瞬間、息を呑んだ。

（あと少しで——そこに、触れられる——）

乳首がマントの裏で硬く尖っている。おまんこから愛液がじわじわ滲み出して、下着の布地を湿らせていた。もしガルドの手があと少し下に降りたら——

「あ、う……っ♡」

声が漏れた。ガルドの小指がリュカの下腹の柔らかい産毛に触れた瞬間、身体が勝手に反応する。腰が微かに浮いた。もっと下に、と身体が訴えている。頭では拒んでいるのに。

身体を翻してガルドの手首を掴んだ。

「触るな」

暗がりの中、焚き火の残り火だけが二人の顔を照らしている。

「……なぜ」

「なぜって——お前、何がしたいんだ。カントだと知って——同情か？ 好奇心か？」